

---

# 新たな勇者の物語

分福茶釜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

新たな勇者の物語

### 【Nコード】

N5970Z

### 【作者名】

分福茶釜

### 【あらすじ】

勇者と魔王との大きな争いから数年後、世界はつかの間の平穏に包まれていた。魔王を倒し、伝説の勇者と崇められる父と、勇者とともに魔王を倒した魔法使いの母を両親に持つアレイは周囲の期待を重荷に感じつつも幸せに暮らしていた。……しかし、彼が13歳の時、再び世界を乱し始めた魔物達によって家族を失ったアレイは、両親の復讐を胸に誓って旅に出る……。のだが旅の途中、大昔に封じられていた魔王の封印を解いてしまう。

魔物に復讐を誓う少年勇者と、はるか昔に封印された魔王との奇

妙な冒険が今始まる。

## 第1話 魔王と勇者（前書き）

『ヤマアラシのジレンマ』

二匹のヤマアラシは凍えた体を互いに温めようと寄り添う。しかし体についた針が互いの体に突き刺さりたまらず間をとる。しかし寒くてまた近づく。針が刺さる。離れる……………

これを繰り返すうちに針が刺さらないで互いに温め合える間合いがはかれるというわけだ。……………まあ、大抵の場合その間合いをはかる前に互いに傷ついて死に絶えることが多いが。

## 第1話 魔王と勇者

「おかーさん、あのね……僕ね、大きくなったらお医者さんになるー！！」

小さな子供。まだ世界のことなんて何にも知らない無邪気な笑顔で将来の夢を語る。

「まあ、ならお母さんが病気になっても治してくれるのね？」

「うん！！僕、おかーさんもおとーさんも村の人もみーんな絶対に助けるお医者さんになるっ！！」

「まあ、頼もしいわ……………アレイ」

これは……一人の少年のはるか昔の記憶。

ドゴオオオオツ！！

巨大な爆発音で俺は目を覚ました。まだ頭が完全に状況を把握する前に、グイツと首根っこをつかまれ勢いよく後ろに引っ張られる。と直後、俺のいた場所に鉄でできた棍棒が振り下ろされた。

「ふむ、この状況で寝ぼけていられるとは貴様はやはり肝が据わっているな」

俺を引っ張ったのは、一点の穢れもない漆黒の髪をなびかせる一人の女。飾り下のない黒いタイトドレスに、絹でできているという黒のロンググローブや黒いブーツで身を包んだ黒ずくめの格好だ。唯一、黒でない物といえば頭の鈍く光り輝く鉛色のティアラだろうか。

「ほら、何をしている勇者。さっさとあのデカブツを倒せ。死ぬぞ」

彼女の指さす方を見れば巨大な魔物が大きな鉄の棍棒を振り上げてこちらに襲いかかってくるところであった。

「あぶねっ!？」

間一髪振り下ろされた棍棒をかわすと俺は魔法の詠唱を始める。詠唱で少し時間はかかるがこういう相手には一発でかいのをかまさないで長期戦になる。長期戦になるのは面倒だ。

「我に宿りし聖なる炎よ、今我に力を与えよ　炎爆!！」

詠唱が終わると同時に、火炎の渦が現れ巨大な魔物は火に包まれる。魔物はしばらく悶え苦しんでいたが、やがて力なく倒れるとそのまま燃え尽きた。図体はでかったけど大したことはない、所謂雑魚という奴だろう。

「うむ。やればできるではないか勇者よ」

「起こしてくれてもよかったと思うんだよね……」

「なぜ私がお前を起こさねばならない。そんなことでは魔王は倒せ

んぞ」

「魔王のお前に言われたくないけどな」

そう俺の横に立って燃え尽きた魔物の亡骸を見下ろしているのは紛れもなく魔王だ。ただ……今の魔王ではない。話せば長くなるが、俺のちょっとしたヘマで大昔に封印されたと言う魔王を蘇らせてしまったのだ。ホントに……世界のみんなごめん。責任を持って俺がしっかり見張るから……どうか俺を恨まないでくれ。

「これは……きつとトルルだな、大方住んでいた森を人に追われてふらふらとしているところを私達と遭遇したのだろう。人がいると知って怒りに我を忘れたようだ」

「なあ……何でこう、魔物と人間ってのは上手くいかないんだろうな。魔王を倒して少しは平和になったかと思えば、今度は人が魔物の住処を荒らすし……それに怒った魔物が人を襲ったりさ……」

「ん、貴様はヤマアラシのジレンマという言葉は知っているか？」

聞いたことがある。たがいに身を寄せ合おうとするが自らの体の針で互いの傷をつけあつてしまうということだった筈だ。

「人と魔物の関係はそれと似通っているのかもしれないな。人も魔物もどちらも平和を望んでいる。しかし両者の考えは食い違っている。そしてどちらも自分の種族以外を見下す傾向にある。これでは手を取り合つて……なんてやっている場合ではないな」

「なあ、気になってたんだけど……魔物も平和を望んでいるのか？」

「それはそうだろう。誰も争いたいなどとは思ってはいない。しかし魔物は人間を下等な種と考える。平和に暮らすためには暮らしを脅かすかもしれない野蛮な人間を排除しようと考えてるのは、まあ人間には納得いかないかもしれんが必然的な流れだ」

「そうか……人間もそう考えてるのかもな」

人間が魔物狩りを始めた理由もそういったものかもしれない。俺は自分の倒した……いや、殺した魔物を見つめる。

「まあ、綺麗事を言っても純粹に人を殺すことが好きな魔物もいるがな」

「なんだそりゃ……」

せつかくの雰囲気がなんだかしまりのない空気になってしまった。俺は今の魔王の言葉で一瞬、心の奥底に浮かんだ人間も純粹に魔物を殺すのが楽しいだけなんじゃないか……という疑問をかき消して彼女に口を開く。

「行こう魔王。この先に魔物に襲われた村がある」

「……村か。しばらくぶりだが。襲われた村など危ないだけではないか？」

少しだけ顔をしかめる魔王。どうやらわざわざ危険な場所には行きたくないようだ。だったらついてこなければいい話なのだが、なぜかこの魔王は俺についてくる。……なんでも封印を解いてくれた礼にひよっこ勇者の俺を見守ってくれるのだとか……俺は、はっき



り言って魔物が大つきらいだ。だからさっきのトロルも人のせいで住処を追われたのだとしても特に何も感じないし、この魔王も本当のところはすぐにでも斬り倒したいのだが今の俺にはまだ魔王を倒せる力はないし、一応命の恩人的な立場でもある彼女を殺すの**も**はばかられる。

「いいんだよ、俺は魔物に復讐がしたいんだから」

「ん、貴様の好きにしろ」

魔王である彼女の前で魔物に復讐すると言ったのは自分でもどうかと思ったがもう何度かこのセリフは彼女の前で使っているし、当の彼女が気にする様子もないのだから良いのだろう。

## 第1話 魔王と勇者（後書き）

どうも、お読みいただきありがとうございます。  
稚拙な文章ですが、楽しんでいただけたら幸いです。

## 第2話 勇者の夢（前書き）

### 『夢』

寝ている間に見るものの方ではないと言っておく。

夢は誰も見erるものだろう。否定する者もいるが無意識に見ているので気が付いていないのかもしれない。簡単にいえば夢とは広い意味での欲求である。欲求はその者自信がどうできるものではない。人が欲求を捨てない限り人は夢を見続け、そして人は永遠に欲求を捨てることはできない。

## 第2話 勇者の夢

今から7年ほど前……

「さあ、アレイちゃん。今日も魔法教えるわね？」

俺の母親、名前はエリーヌ。6年前の魔王討伐の際に勇者とともに魔王を打倒しそのまま勇者と恋に落ちた大魔法使い。彼女の魔法の力に対抗できるものは世界でもいるかいらないか分からない。

「うん。おかーさん……今日は何をするの？」

当時5歳の俺は両親から優れた魔法と剣術を教えられ、5歳にしてはかなりの力を持っていた。それゆえ周囲の期待も大きかったが

……

「それじゃー……今日はアレイちゃんのために治療魔法を教えましょうー！」

「えっ！！ホントに！？やったあー！！」

その頃の俺は勇者でも魔法使いでも無く、医者になることが夢だった。どうしてかと言われればよくわからないが、病人やけが人を治してしまう……そんなお医者さんとやらにあこがれていたのだろう。しかし、周囲はせっかくの俺の剣術と魔法の才能を放っておけなかった。魔王を倒したばかりでまだまだ人間の暮らしも安心しない中、今度は人間達がいざこざを起こし始めたのだ。もはや伝説となっている両親の息子　しかも両親の優秀さを受け継いでいるを利用すれば世界の盟主的な存在になれると俺の祖国は考え

た。また、魔王を失って統制の利がなくなつた魔物から自分達の暮らしを守ってほしいという村人達の期待もあつて、俺は国からも村人達からも次代の勇者になることを期待されていた。

俺の夢を知っていた両親は気にしなくていいと言つてくれていたが、頻繁にやつてきては俺を積極的に勇者にさせるべきだと口うるさく言う宮廷の役人には手を焼いていたようである。

「そうねえ……普通、治癒魔法つて言えば水魔法が一番基本なんだけど、難しいのを先に覚えれば簡単なのも覚えられるから混合魔法での治癒を教えるわね？」

「うんっ！！」

両親は俺を勇者に育てるためではなく、将来どのようなことが起こつても対応できるように、魔法や剣術を教えてくれていた。特に母は、俺の夢のためには欠かせない治癒魔法を積極的に教えてくれていたのだ。

「うん……俺はそつち方面は全然ダメだからなあ……」

医療系に関する才能を持ち合わせていなかった俺の父親、ジャードは、いつも俺と母が行う訓練を羨ましそうに見ていた。自分も才能があればアレイに存分に教えてやれたのに……エリー又ばかりずるいぞ。……それが彼の口癖だった。しかし父から教えられた、状況の把握の仕方や、緊急時での判断力などは治癒魔法と同じくらい俺の夢には重要なものであつたのだ。

「うふふジャード、もうあなたは用済みね。これからアレイちゃん  
は私の訓練だけで十分みたいだわ」

「な！！なんだとっ！？ま、まだだ、まだ俺にはアレイに教えることが山ほどある！！」

「あら？この前、アレイは天才だあー、俺の教えたことをみんな覚えてしまったぞ！！とか言っただけじゃなかったかしら？」

「んん！？そ、そんなこと言っただけかあ？」

「言っただけよ！！誤魔化そうとしてもダメなんだから」

両親の訓練は厳しかったが決して俺の限界を超えたものは求めず、ゆっくり、少しずつ確実に両親の力は俺に継承されていった。

「いや、言っただけね」

「ぜええったい、言っただけ！！」

「おかあさん！！ふざけてないで治療魔法教えてよっ！！」

楽しくて自然と笑みがこぼれる、そんな毎日を俺は両親と送っていた。思えばこの頃が一番楽しかったかもしれない。魔王を倒し数年、人の生活も徐々に向上してきているまさに人々が夢を見始めた時期だったのかもしれない。

## 第2話 勇者の夢（後書き）

お読みいただきありがとうございます。  
……短いですがね？

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5970z/>

---

新たな勇者の物語

2011年12月21日21時51分発行